

No.	号	執筆者等	思い
5	1988年7月号	松井覚進	<p>「戦争」シリーズを担当したスタッフの一員として、私は、次のような意思が投稿者の心の底に流れていることを知った。</p> <p>①定年になったり、家業を子供に譲ったりして社会の第一線を離れ、精神と肉体の自由を得て自分の戦争体験を語る余裕が生まれた。</p> <p>②残りの人生の短さを思い、後世に、あるいは子孫に自分の戦争体験を言い残しておこうという思いにかられ、遺書のような思いで書いた。</p> <p>③最近の右傾化した社会政治状況に対して、自分の戦争体験を役立ててほしいという願望を持っている。</p> <p>内容は、草の根の戦争体験が大半で、「内なる非」を率直に語る勇気ある証言が多く、私はしばしば胸にこみ上げるものを抑えることができなかった。(機関紙不戦No.5、1988年7月)</p>